

すいそうすいそうすいそうすい

隨

想

## 体験の大切さ



山田直義

砂遊びや泥いじりは、幼児の特権であり、創意工夫の場でもある。小学生にとっても、広場での遊びが、創意工夫の場であり、人間関係を学ぶ場でもある。遊びや日常生活を通して文化の伝承が行われることを考えれば子供の体験の減少は、気になるところである。

最近、学校においても体験的な行事の試みがなされるようになってきた。異年齢集団による清掃活動もその一つである。いわゆる縦の関係で人間形成を図ろうとするものである。本校も縦割りの班で清掃活動をしている。たとえば、清掃する班、もたもたしている班など、様々である。上手にできる班は、班長のリーダーシップのとりかたがうまい。なによりも、班長が率先垂範して活動するので、下級生がついてくる。班長になつた六年生は、グループをまとめるのにどのようにしたらいふ。

昔の遊びが、見直されてきたのも、体验が人間形成に大きく役立っていることを再認識したからであろう。テレビにかじりついている子供の姿からは生き生きした未来をつくり上げる姿が浮かんでこない。その点、新教育課程の実施の趣旨を生かす面からも体验を通して、子供の人間形成を図っていくということは、当を得たものといえよう。

五年生は、六年生を見習つてその良い点を受け継いでいくのである。

これは、異年齢集団の良いところであつて、同年齢集団にはあまりみられないところである。清掃活動だけではなく、業間活動の遊びの時間、花壇の世話をなど、縦割りの活動を生かす場はかなりあるので、できるだけとりいれて児童の人間形成に役立てたいものである。

さらに本校では、五十五年度、五十六年度の二か年間、地域ぐるみで、県教委の指定を受けて、「勤労体験的学習」の研究をしてきた。農山村という環境にありながら、子供たちは、作る育てるなどの実習的、体験的なことが少ない。六年生でも満足にくわを使える子はほとんどいない。見ていてハラハラしどおしである。その中で、S男のくわ使いは抜群にうまかった。彼は将来の進路を「家の後を継いで農業をする」とすでに決めている。彼は、言葉だけでなく、学校から帰ると、毎日農作業の手伝いをする。彼のくわさばきは、そこで身についたものである。彼のくわは、土をしっかりとこみ、しかもリズムにのつている。父親とともに汗を流しながら身についた技術である。

このように体験のよさは、できたらしさもさることながら、自分が体感した、参加した満足感にあるのではないか。たとえ失敗しても、自分が挑戦した充実感は残るであろう。今までの教育活動を再吟味して体験的な学習を工夫し、児童一人一人に充実感を味わわせる教育活動を目指して取り組んでいきたい。

(磐梯町立磐梯第一小学校教諭)